

東京春祭の Stravinsky vol.2

ストラヴィンスキー・ザ・バレエ

～ド・バナの《アポロ》、ベジャールの《春の祭典》

日時：2013年4月14日(日) 15:00 開演 会場：東京文化会館 大ホール

●ストラヴィンスキー：バレエ音楽《ミューズを率いるアポロ》

《春の祭典》に代表される「原始主義」の荒々しい音響が炸裂する音楽から離れたイーゴリ・ストラヴィンスキーは、1920年の《プルチネルラ》以降1950年ごろまで、バロック時代のイタリアの和声や形式を範とした「新古典主義」の作品を発表していた。

このバレエ音楽《ミューズを率いるアポロ》も「新古典主義」時代の作品で、1928年にクーリッジ財団の委嘱により作曲され、アメリカ議会図書館（ワシントン D.C.）の現代音楽祭で初演された。

全音階的な技法による非常に簡素化された形式のなかにも、ときおりそこから逸脱する和声やジャズの要素などが織り込まれ、流麗で穏やかな雰囲気音楽に仕上がっている。舞台はクラシック・バレエの古典的な装飾性を重視したものだが、これといった筋書きはなく、アポロの誕生（第1場：プロローグ）と、3人のミューズとアポロの出会いとエピソード（第2場：9曲）を情景的に描いている。

●ストラヴィンスキー：バレエ音楽《春の祭典》

バレエ音楽《春の祭典》は、《ミューズを率いるアポロ》とは対照的に、激しい音響とリズムが交錯しながら巨大な音響空間を築きあげるストラヴィンスキーの「原始主義」時代の傑作で、《火の鳥》（1910年）、《ペトルーシュカ》（1911年）とともにストラヴィンスキーの「三大バレエ」と呼ばれている。これら3作は、ディアギレフ率いるバレエ・リュスのパリ公演のために作曲されたもので、《春の祭典》は1913年に完成し、その年に落成したパリ・シャンゼリゼ劇場で初演された。初演時の会場は、肯定派と反対派が入り乱れての喧騒の果てに殴り合いになり、ダンサーたちは音楽が聴き取れないほどだった……という逸話はあまりに有名である。

バレエの筋書きは、対立する村同士の抗争後の大地礼賛と太陽神の怒りを表現した「第1部」と、その怒りを鎮めるために生贄に選ばれたひとりの処女が、車座になった長老たちの輪のなかで死ぬまで踊り狂う「第2部」からなる。

ストラヴィンスキーは『自伝』のなかで、白実夢で見た異教徒の儀式から着想を得たと書いているが、実際には友人の画家レーリヒが発表したバレエの原案にもとづいている。「生贄（死）」を通じた「再生」という自然の生命力と太陽を礼賛する宗教儀礼がテーマとなっており、ときに破壊的な不協和音を炸裂させつつ、空間をひとつのキャンパスに見立てたような強烈な色彩感とリズムの構成により、近代西洋音楽の枠を超えた音響が繰りとどろく。